

【芦川写真集】第2弾：山村芦川の日常

今回から芦川作品の第2弾「写真集芦川(あしがわ)」から毎回10点ずつ6回に亘り計60点を紹介します。この第2弾も全て芦川が合併する以前、まだ村の時代に収めたものです。2011年にそれまで撮り溜めたフィルムの中から選び出し「写真集芦川」を制作しました。今回は第1回目の掲載となります。

芦川は山岳集落で昔は婚姻、茅葺屋根の葺き替えや普段の生活上の助け合いなど、全てが集落の中で行われることが当たり前のことでした。いまだに集落住民の結束は固いものがあります。

故にお年寄りで一人住まいの婦人は、外から来た者に対しては警戒心を持つことがあり、私が写真撮影で当時の村に入った時は、撮影できるまでにかかなりの時間がかかった場合もありました。しかし、気心が知れば親切に受け入れてくださる優しい芦川人なのです。

撮影に出向いたお宅でお茶をいただき話し込んでしまい、一度もシャッターを押さずに時が過ぎ、そのまま帰宅することもたまにはありました。こうしてじっくりと長い時間をかけて出来上がった写真集です。

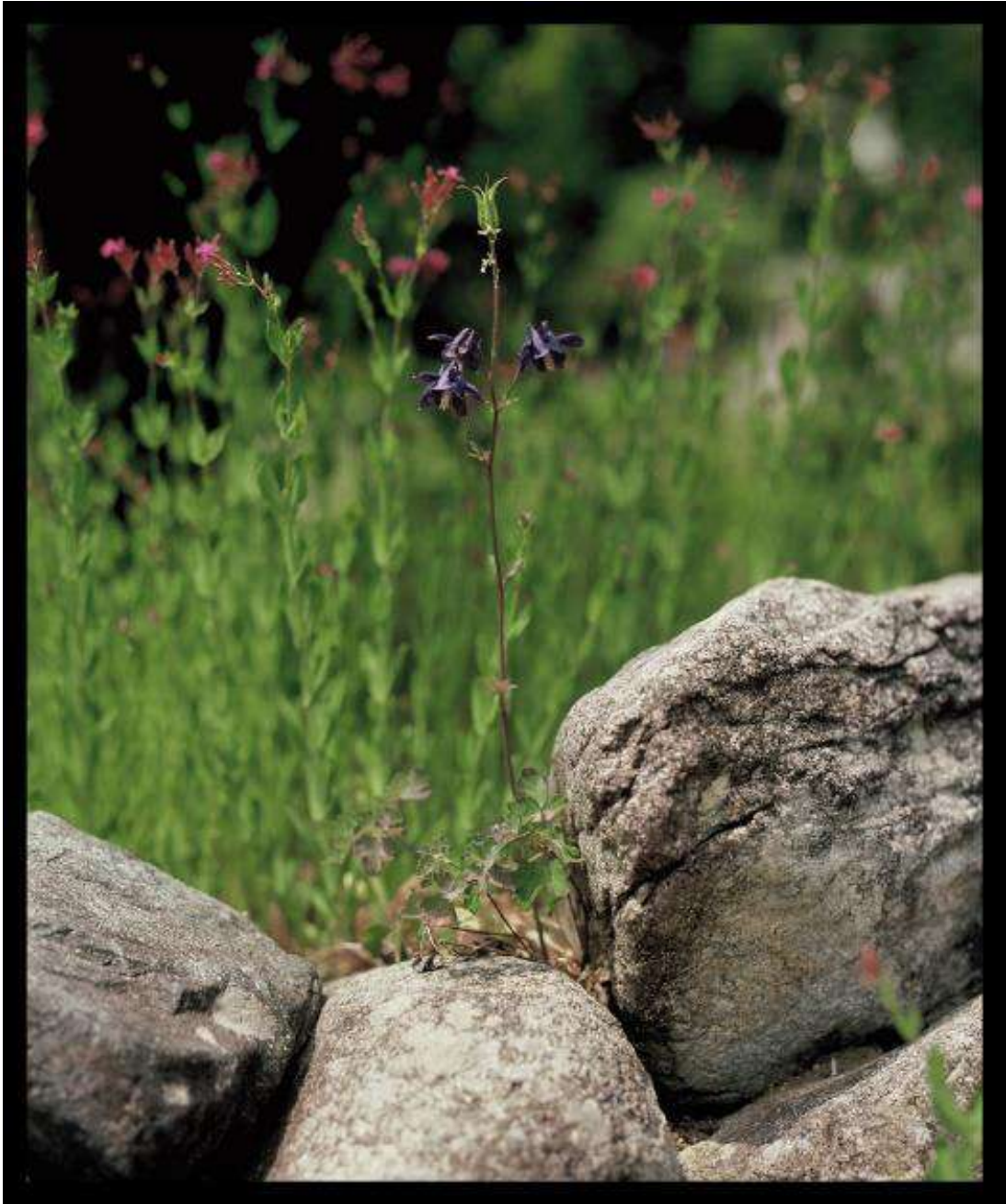
第1弾の土門拳文化賞受賞作品は住民の精神性を主に取り上げたものでしたが、このシリーズは自然環境、農業、人物、祭事、空き家、生活の様子など芦川全体を幅広く紹介するものです。

第2弾芦川写真集の作品は、山梨県笛吹市春日居郷土館・神奈川県座間市ハーモニーホール座間で個展を開催しました。

写真家 高橋ぎいち



- 1 畑の隅に耕耘機が置かれています。^{あしがわ}芦川の畑は決して広くはないのでこのくらいの大きさで使い勝手が良いのです。この機械も長いこと畑の土を耕して芦川の土を知り尽くしているのです。働き手も年々高齢化し、どうしても機械力に頼らざるを得ません。



2 集落の中の狭い道を歩いていると小さな草原くさばらに出会いました。足を止め撮影に取り掛かります。重ねられた石の硬さと植物の柔らかさが融合の一瞬です。



3 平地の畑であれば境に桑の木などが植えられているものなのですが、土を耕すと石が現れる芦川ではこのように境石や石積みに使われることとなります。最初の開墾作業はさぞかし大変なことだったと思われます。



4 嫁に来て長い年月一生懸命働いてきたおばあちゃん。この年まで丈夫で過ごすことができました。今はゆったりと隠居の身です。現在は家族三代で暮らしています。顔に刻まれた皺には苦労だけでなく幸せも垣間見ることができます。



5 母屋の続きに建てられた納屋です。良く見ると納屋の中にまで草花が生え暫く使っていない様子です。母屋を訪ねると誰も住んでいないことが分かりました。ここにも空き家があったのです。



- 6 ここは四つある集落の内の新井原集落です。東側の法面に家が建ち、割合日当たりも良い場所です。従って野菜栽培には都合が良く気温が低くなる時期になると手前に見える骨組みはビニールハウスとなります。



7 芦川の農地は畑が多く田んぼは少ないのが現状です。その中でおうしゆく鶯宿集落は田んぼの耕地面積が多くお米を栽培しています。芦川の中央を川(芦川)が流れているのですが、農地よりも大分低いところを流れているので、取水に苦労があります。だからこそ採れたお米は一段と美味しく感じるのです。



- 8 石積みの多くある景観の中でもここは実に素晴らしい場所だと思われま
す。長い時間崩れること無くたたく石積みを造った先人の技量に感心させら
れます。ジグザグに組み立てられた石の上を歩いて家まで登ることができま
す。今では^{いしく}石工も少なくなり技を継承することが危ぶまれています。



9 作業部屋で今日収穫したばかりのほうれん草の選別作業をしています。ほうれん草に限らずジャガイモでも大根でも芦川の野菜はとても美味しいのです。昼間と夜、さらに季節ごとの温度差が大きいことと、山間集落ならではの恵まれた有機肥料のお蔭と言われています。



10 山の稜線の奥に隠れるように小さく顔を見せているのが富士山の形に似た「小富士」と呼ばれる山です。この山は鶯宿集落からしか見るできません。住民はこの「小富士」を本物の富士山のように崇敬し、色々な願いをしてきました。

文/写真 写真家 高橋義一(高橋ぎいち)

翻訳編集 JST 客観日本編集部